

Japan Evangelical Theological Society

日本福音主義神学会

J·E·T·S·NEWS Vol.20

発行所／〒651 神戸市中央区中島通2-3-5 神戸ルーテル神学校内



教会と神学のパースペクティブ

全国理事長 橋本昭夫

神戸の未成年による未曾有の類の殺人事件、大阪の精神病院の深く不審な経営、大手証券会社の不法な利益供与、「動燃」の核廃棄物のずさんな処理、政府行政改革の不透明な先行きなど、ある種断末魔的症状とも思える状況が社会のスクリーンに投写されている。繁栄と安定が謳歌されたのは何年前のことだったろうか。あるいは「近代日本」というシステムの崩壊の前兆とも見ることができよう。教会が教勢のふるわないことを思い、また多くの教派で教職を志す人材の減少を憂慮する間も、外なる「社会」は教会の存在を頼りにすることなく、いとなみが進められている。いずれの方向かは定かではないけれども。

教会も、一面、社会学的法則のもとにあるひとつの運動体であり、その維持運営も影響力の行使も、社会の一部をなすに過ぎないようにも思われる。教会と神学についてのこのような観察は、それらについて考察が抽象論に陥らないために、どうしても必要であると言わねばならない。だが、もし私たちが、現実の意

識と展望において、その観察の域内にとどまり、私たちの教会の世にあらじ意味をプロヴァンシャルなものとし、神学を単にセクショナルなものとしているならば、それは教会の召して本質、神学の使命と奉仕をほんとうにとらえているとは言えないであろう。教会は「歴史におけるキリストのからだ」であると言われている。そして主キリストが、この世界とその歴史のすべて、そして創造宇宙の無限とも思われる空間の主であるとするならば、教会の存在とその働きのパースペクティヴは、「地方的・部分的」ではありえないはずである。教会と神学の意味について具体的であると同時に「本質的」であるためには、私たちは何を再確認せねばならないのであるか。

私はこの夏、オスロに住む友人の好意あふれる案内でトルコ（小アジア）の一部を訪れる機会を得た。聖書の地名で言えば、アタリア、ペルガ、ビシディアのアンテオケ、コロサイ、そしてラオデキアなど（それにはヒエラポリスとアスベンドス）を行の一部の町々である。宿舎となつ回った。使徒パウロの第一次伝道旅行のアタリア（現在はアンタルヤ）近くのリゾート地ケメルでは蟬の声な

ども聞こえ、使徒パウロもそれを耳にしながら伝道したのだろうかと思ひが誘われた。ところで、これらの町々の多くはヘレニズムの時代からローマの全盛期にかけて存在したものであると知った。あるものは地震や戦禍によって崩壊したまま放棄され何世紀もの間の風雪で埋もれてしまい、わずかにその「高い」部分だけが見える、というところもあったが、他の町では発掘もされかつての榮華をほうふつとさせるところもあつた。とくにビエラボリスなどは発掘が活発に進められているせいであろうか、ローマの都市の華麗で洗練された文化をしのぶことができた。市のメイン・ストリートの石積みの豪華な建造物、円形大劇場のあと、城壁・城門など遺跡からもその文化、その技術の水準の高さが見てとれる。そして思はれた。使徒パウロが、「十字架と復活の福音」をたずさえて飛びこんでいったのは、このようなこの世の榮華と力の中であつたのだと、「また聞くことにする」とおざけられつつも、「救いにあずかる者には神の力」である福音を彼は、目に見える力と榮華をもろともせず伝えたのである。

人の目にはエルサレムは中心ではなかつた。ペテロをはじめとする弟子たちも世の目からは見えぬ人々であった。パウロも身体剛健、容姿端麗、弁舌流暢でもなかつたように察せられる。しかし、「土の器」であつた彼らのうちに生きておられたの



は十字架の主、復活の主であった。そしてこの生ける主こそ、彼らを通してあのローマの榮華の中で当時の階級の「下」からはじめて「上」に至るまで、ひとりひとりの心の中に「救い主」として入っていかれたお方であった。見えるところに逆らつて神の歴史は進められていったのである。

教会も神学も世の目には隠れているかも知れない。しかし、その力は生ける主イエス・キリストのゆえにこの世界に働いている。今日、私たちが置かれている日本の状況を思うとき、教会と神学の使命は極めて大きいと言わねばならない。「その口からである一つ一つの言葉によつて生きる」という真理が、日本の社会においていよいよ明らかになりつつあるからである。その使命を果たしていくために、教会も神学も、みずからの信仰の次元をつねにその働きの前面に置き、意識している必要があるのでないか。福音主義神学に期待されている課題は大きいと言わねばならない。

そしてこの生ける主こそ、彼らを通してあのローマの榮華の中で当時の階級の「下」からはじめて「上」に至るまで、ひとりひとりの心の中に「救い主」として入っていかれたお方であった。見えるところに逆らつて神の歴史は進められていったのである。

各地区部会報告

東部部会

昨年秋は、須磨における全国研究会議に合流したため、東部として独自の研究会を開くことはありませんでした。九七年春の研究会議に向けてさまざまな題目が模索されていく

中、これまで研究会議のテーマとして、エホバの証人、カウンセリング、末期医療、力の伝道など、無論重要な題目を追いかけてきたとあります。少しじゃーナリスティックな題目を取り上げました。

しかも、いわゆる聖書学の研究そ

のものではなく、教会と神学を専門

としている教師が、乖離している状

況を憂慮しつつ、研究畠と教会を結

びつけるため「教義から説教」とい

う題で旧約聖書から取り上げました。

木内信嘉氏が「レビ記から説教」、

杉本智俊氏が「歴代誌から説教」と題して六月一六日、OCCにて講演をされました。本年一二月一日には、新約学からの研究発表を予定しています。(藤本満)

一、理事会と総会 於OCC

一九九六年一〇月一一日

一九九七年三月二一日

一九九七年六月一六日(総会)

二、研究会議
一九九六年一月二十五日

全國研究会議「人間の宗教性」

神戸シーパル須磨にて

一九九七年六月一六日「教義から説教」

木内伸嘉氏「レビ記」杉本智俊氏

「歴代誌」

聖書部門(一月二七日)発題者

新約学:シェード氏、旧約学:伊藤明生氏

組織神学部門(三月三日)ステバ

ノ・フランクリン氏「福音主義神

学の理論」聖契神学校

歴史神学部門(三月三日)「歴史

神学の今日的貢献:アリスト

マグラス氏による」藤原導夫氏・

藤元満氏発題

実践神学部門(三月四、五日)

「平和講演会」セミナーに協賛

入会 井上圭典氏・遠藤嘉信氏・

多井一雄氏

退会 後藤茂光氏・舟喜慈郎氏

現在 名誉会員二名、賛助会員一

名、正会員一七七名、準会員一

名、合計二〇四名(前年度二一

一名)

五、理事会構成

役員理事/理事長 佐布正義、副

理事長 大滝信也、書記 藤本満、

会計 藤原導夫

学会誌担当理事/木内伸嘉

中部部会

部門理事/一般学 沼慎一・東条

隆進、聖書学 津村俊夫・内田和

彦、歴史神学 横山武、組織神学

伊藤淑美、実践神学 金本悟・倉

沢正則

全国研究会議「人間の宗教性」

神戸シーパル須磨にて

一九九七年六月一六日「教義から説教」

木内伸嘉氏「レビ記」杉本智俊氏

「歴代誌」

聖書部門(一月二七日)発題者

新約学:シェード氏、旧約学:伊藤明生氏

組織神学部門(三月三日)ステバ

ノ・フランクリン氏「福音主義神

学の理論」聖契神学校

歴史神学部門(三月三日)「歴史

神学の今日的貢献:アリスト

マグラス氏による」藤原導夫氏・

藤元満氏発題

実践神学部門(三月四、五日)

「平和講演会」セミナーに協賛

入会 井上圭典氏・遠藤嘉信氏・

多井一雄氏

退会 後藤茂光氏・舟喜慈郎氏

現在 名誉会員二名、賛助会員一

名、正会員一七七名、準会員一

名、合計二〇四名(前年度二一

一名)

五、理事会構成

役員理事/理事長 佐布正義、副

理事長 大滝信也、書記 藤本満、

会計 藤原導夫

学会誌担当理事/木内伸嘉

され、よい学びと交わりのときをもたせていただいた。ひき続いてもたれた総会では、中部部会は小さいながらも、積極的に福音主義神学会の働きを進めていこうと意欲的な姿勢が終始つらぬかれており、今後、他の超教派的活動とどう結びつけ、有機的な働きとしていけるかが課題であるとされていた。研究会でも、総会でも、その場に身をおいて交わりをもつことの喜びと意義を感じさせられた。(橋本昭夫)

西部部会

昨年の全国研究会議の主題でありました「福音と人間の宗教性」をめぐって考究を進めていくことになりました。新築になった神戸改革派神学校を会場に共同の学びをさせていただきました。四月二一日の詳細は以下の通りです。コーディネーターは、津村市川、福田、各理事でした。

二、理事会

一九九六年七月二九日、一〇月三
日、十一月二七日、二月二七日、

三、諸報告

各部会報告、決算報告、学会誌報告を承認した。

一、理事長がエペソ人への手紙三章
一四〇一九節から、知力を尽くす
神学の営みの背後にある福音への
信仰について勧めた。

三、諸報告
各部会報告、決算報告、学会誌報
告を承認した。
一九九六年一月二五、二七日に
神戸・須磨で開催された全国研究
会議は「人間の宗教性」をテーマ
に八八名が参加。反省点として部
門別の設定と聖書学の強調の必要。
聖書観と福音主義の方向性の確認
があげられた。
が、学会誌出版の年三五の行

四 学会誌出版の際の毎年五〇万円ほどの個人的立替解消のため、各部会は負担金の半額を九月末までに納入する。会費の早期納入をアピールする。

五、会員名簿は三年毎に出版する
ととし、一九九七年の次は二〇〇〇
〇年に出版する。電子メールアド
レスも記入する。

全国理事会

名譽会員一名	(召天中島彰氏)	一九九七年六月一日
賛助会員二一名	(入会カベナンタ ー書店、退会神戸ルーテル聖書學 院)	日本イエス名古屋教会
正会員一四六名	(転出 石丸新氏、 会計 鷹取、学会誌 石黒各理事	東部 佐布・藤原、中部 松浦、西部 橋本・瀧浦 水上・

一九九六年一月一日、一九九七年二月一七日、九月二六日
理事長 水上勲、書記 安村仁志
会計 松浦剛、学会誌 饂上正敏
理事 黒川雄三・西堀則男

四、会員異動

転入 羽島純二氏（西部より）
転出 西村敬憲氏（西部へ）
現在会員数三七名

五、予定：研究会
一九九七年一一月一〇日午後一時
「礼拝における讃美」

講演二「聖書における宗教性：教義学の視点からの考察」牧田吉和氏
一、会員現況
名譽会員一名（召天中島彰氏）
賛助会員二一名（入会カベナンタ
一書店、退会神戸ルーテル聖書学

一九九七年六月一日
日本イエス名古屋教
東部 佐布・藤原、

二年に検討。
七、ホームページの開設について各
部会で協力を求める。

会計報告

福音主義神学会（全国会計）
一九九六年度決算報告ならびに一九九七年度予算

項目	収 1996年度予算	入 1996年度決算	1997年度予算
東部負担金	600,000	600,000	600,000
中部負担金	120,000	60,000	120,000
中部負担金(96年度分)			60,000
西部負担金	450,000	450,000	450,000
学会誌売上（全国）	200,000	214,270	200,000
広告収入	350,000	205,000	350,000
献金	0	20,000	0
雑収入	0	0	0
小計	1,720,000	1,549,270	1,780,000
前期繰越金	△212,758	△212,758	△201,719
合計	1,507,242	1,336,512	1,578,281

項目	支 1996年度予算	出 1996年度決算	1997年度予算
学会誌特別会計拠出金	1,300,000	1,300,000	1,300,000
理事事会費	84,462	82,872	90,000
事務通信費	10,000	2,829	10,000
研究助成金	50,000	0	50,000
ニュース印刷代	70,000	52,530	70,000
全国名簿印刷代	100,000	100,000	50,000
出版基本金費	0	0	0
予備費	0	0	8,281
小計	1,614,462	1,538,231	1,578,281
次期繰越金	△107,220	△201,719	0
合計	1,507,242	1,336,512	1,578,281

出版基金会計

取 全国会計から	入 0	支 出 0
前期繰越	708,421	次期繰越 708,421
合計	708,421	合計 708,421

日本福音主義神学会ニュース
一九九七年一〇月一五日発行
発行 日本福音主義神学会
印刷 編集 滝浦滋
グロリア・サービス社



- 二、二七号「戦争」を発行した。
出版費一八四一四四円、学会誌特別会計残金二一五八五六円。論文は主張のみでなく論点を有すること。DTPの導入により、論文提出はワープロ形式で。
- 三、年末に二八号「人間の宗教性」を発行。
◎懸賞論文、聖書訳義ノート、賛助広告を募集中。学会誌委員まで。
◎会員各位の業績報告受付中

学会誌報告

一、編集委員 木内伸嘉、藤本満（補佐）、隅上正敏、石黒則年、鍋谷克爾（顧問）